昭和60年7月発行　第10号

東京龍門会報

発行所
東京都江東区塩浜2－4－20
深川物流センター7階
今村電機株式会社内
電話 03（699）3791～2
東京龍門会
発行人
今村　彬

女性の参加が目立った今年の総会

今村彬会長あいさつ

パーティ乾杯

東京龍門会の総会も早いもので今年で十二年目を迎え、例年の会場である三州クラブ（品川区上大崎）で、五月十八日(土)午後二時から開催された。七夕さまではあるまいが年一回の出会いに、同窓生諸氏は新たな感激で総会に参加され先輩・後輩お互いに和気相々で談笑のひとときを過ごされた。

今年は女性の参加者が多く総数百三十名を越える同窓生が参加され盛大に行なわれた。郷里の方から母校の九万田学校長と新納数義同窓会長が、また恩師の柴田素男先生（大15～昭8在職英語担当）も来賓として例席された。

総会は東京龍門会会長の今村彬氏のあいさつで始まり、議事の審議に入り59年度の事業活動と会計の監査報告、つづいて60年度の事業計画と予算案の説明があり、いづれも満場一致で承認された。

議事審議のあと来賓各氏のあいさつがあり、九万田学校長からは母校の近況報告と同窓生の協力で生まれた加治木高等学校教育振興会の助成で在学生達がどんなに助けられていることか、そしてその教育的効果もあがりつつあり、同窓生の皆さんに感謝していますとの挨拶があった。新納同窓会長からは62年度が母校の九十周年に当るため、記念行事の具体策として、同窓会名簿を改訂出版する。これは正確を期するためにコンピュータを駆使して編集印刷します。さらに八十周年記念事業後に発足したほかに類をみない「加治木高等学校教育振興会」の基金も同窓生の方々の拠出などにより、三千万円に達していますが、これを五千万円にという計画など。そしていくつかの記念事業を、同窓生の大多数を占めるようになった高校卒業の方々を中心に企画立案中である旨の話と、昨年の天皇陛下をお迎えしての植樹祭の時に鹿児島県歴史資料センター黎明館へ陛下がお立寄りになり、責任上私が案内役を務めた。その際のユニークな話をされた。続いて在職中の思い出話を紫田先生から、そして同窓生を代表して浜田尚友氏から国分前会長に在任中の労をねぎらう言葉と世相論評を、また忙しい中を村山喜一代議士（中38）もかけつけてもらい、パーティーに移った。パーティーでは毎年寄贈いただいている郷里のアサヒ焼酎（隼人町西光寺で醸造されている）で盃を交

わしながら午後五時頃まで談笑、お互い一年後の再会を約して散会した。

最後になりましたが、小里貞利代議士（高1）より祝電と焼酎の寄贈が、また浅草橋の誠鏡より清酒を、日当山醸造㈱よりアサヒ焼酎の寄贈がありました。厚く御礼申し上げます。

○　○　○

会長あいさつ

東京龍門会会長　今村　彬（高2）

今日はお忙しい中を郷里から母校の学校長と同窓会長が、また恩師の紫田先生のご臨席をいただき厚くお礼申しあげます。また同窓の皆さんが多数ご参加くださり本日の総会を盛大に取り行なう事の出来ましたことに重ねてお礼申しあげます。昨年国分前会長よりこの任をお引き受けして早いもので一年が過ぎました。前会長が精力的に色々と活動なさったのに私はこれと言った動きも出来ず、申し訳なく思っております。

母校からお持ちいただいた同窓会誌を見て学校の教育内容の充実ぶりにことに進学率の向上に我々同窓生としては大変嬉しく思います。我々出稼ぎの同窓生も各方面にわたって活躍しておられます。村山・小里の両代議士も国会の場で大いに活躍されており、今年は選挙もささやかれていますが、お二人そろって当選されますよう同窓生として応援していきたいものです。また毎年元気に出席されていた方々で今年は体の不調から欠席するという返事も多く、昭和一ケタも若いと思っておりましたが、高一回卒の原田中さんが去る四月二〇日に突然亡くなられ、人間の命のはかなさを痛感させられました。

さて東京龍門会も会のマンネリ化を防ぐ意味から運営委員会のようなものを設けて巾広く会員の皆様の意見を聞かせていただき、より良い会の発展に尽したと思っています。母校も90周年を迎えようとしていることでもあり、今年度から八十才以上の同窓生からは年会費を頂くのをやめようということなど幹事会で決めております。よく他校の同窓会の状況など聞きますと、年度別の同期会はけっこう賑やかに行なわれているようですが、総会となるとどうも足が遠のき、会費の徴収も思うようにいかないというようなこと等で、どこでもそれぞれ苦労されているようです。会費の徴集方法で年度別上納方式といったやり方をされている同窓会もあるようです。我々も今後検討していきたいものと思っておりますので、皆様のお知恵を借りたいものでございます。

とりとめない話になりましたが、母校の発展と会員の皆様のご健康をお祈りしまして挨拶にかえさせていただきます。

随筆

衆議院議員　村山喜一（中38）

私は昭和十四年三月加治木中学校を卒業しました。青春期に受けた日高佐七校長の修養団方式による思想訓育は、その時代の象徴でもありましたが、いまでも鮮烈な残影を心に留めて居ります。家も隣りでしたが墓も隣りです。墓参りのついでに先生の墓に水をたむけることもありますが、思想性においては相容れることがなかった先生からみたら不肖の弟子だったなあと淋しく思います。でも民主主義というのは相互に多元的な価値観をもつことを保障し共存する仕組みだと思っています。

私は昭和三十年県議に当選以来県議二回、衆議九回計十一回選挙に出馬しました。選挙でもまれるなかで自己形成ができたと思います。いま社会党本部の総務局長として「政権担当ができるニュー社会党」をめざしマネージメントの仕事をやっています。日本における社会主義とは何か。人類の平和と共存、自由と民主、公平と平等、自治と連帯、自然と人間の共生、これ等の価値観を結ぶものはヒューマニズムではないかなど模策を続けています。

私は党の科学技術の政策委員長をしています。党内には工学博士の議員も居るのですが、最近米国のジエラルド・K・オニール博士の書いたテクノロジー・エッジを読んで学ぶところが大きいでした。彼はこれからの技術革新はその技術が㈠人間個々人に役立つものであること、㈡エネルギー効率をよくするものであること、㈢これ以上環境を悪くしないことをあげています。私はこれに平和のためにのみ使われるようにすることを加えたいと思います。これからは情報化社会の時代です。ニューメディアが多元化するなかで戦争防止に役立ち、双方向性情報メディアが分権化をうながすことを期待しながら、自由と規律を国民共有のものにしたいと思います。

反核軍縮は人類の生きのびるための今日的課題です。戦争放棄の日本国憲法を世界の普遍的なものにしていくことをめざしながら政治にとりくんで参りたいと思います。

衆議院議員の任務の一つは代議士と言われるように有権者の代表であり、国会と郷土を結ぶことです。鹿児島県と北海道の選出国会議員は超党派的に結束して予算要求の行動を展開することで霞ヶ関では有名になっています。良いことだと思っています。私も八期二十二年の国会議員として在職していますが、最近東京龍門会の中堅の人達と接触することも多くなりました。みんなそれぞれの場で全力をつくして頑張っていることを知り頼もしく思っています。いまをよりよく生きることが、

どんなにすばらしいことなのか、いくらか判るような気がします。東京龍門会の諸兄姉弟妹のみなさん、どうぞお元気で御活躍下さい。

「永田町の光景」

運輸政務次官　小里貞利（高1）

議員会館の五階にある私の事務室から眺める光景は、そぼ降る雨の中で、霞にかかった首相官邸が薄っすらと浮かんで見える。それはまるで今の政局かのようである。田中角栄先生が創政会騒動のなか病に倒れ、政界の不確実性をまのあたりに見た昨今、そこで活動する政治家の動きを紹介すると、朝つゆもさめやらぬ頃、永田町の活動が始まる。スケジュールの差はあれほとんどの議員が、朝八時頃から自民党本部で開かれる政策調査会の諸部会や、政務次官であれば政務次官会議に出ることで始まる。ここでは各省庁、各団体そして企業より、現在審議中の法案に対する主旨説明、質疑や要望等を議題として話し合うことになる。ここで法案の党方針が明確にされ議事堂内で行なわれる委員会、本会議に提出される。

議員会館へ帰ると、今度はいろいろな党会派や団体等との会議、レセプションへの出席依頼などの決裁や、地元からの陳情を受けたりといった、デスクワークと接客が主な仕事となり、客の多い時は三・四十人にもなる。議員の仕事というものは、まったくサービス業の集合体のように思えてならない。事務所で一休みする間もなくまた委員会、本会議へと議事堂内での活動に移る。本会議が長い時は、夜中まで審議される。

このように朝早くから夜おそくまで、目まぐるしく一生県命にかけ回っていると汗もにじみ出てくる。汗は実りの多い仕事の成果がわかるのが一つの法則だが、加えて我々の場合、観覧者も増えてくる。そして最後には審判団に至るまで応援をしてくれるのである。そしてそこには政治という作品ができあがっていく。この光景を私は愛し胸いっぱい楽しんでいる。今夜もまた夜の会合へと車を走らせながら……。

「井筒部屋を訪ねて」

相撲の井筒部屋といえば最近なじみが深い、そこの井筒親方が東京龍門会の同窓生、福園昭男氏であることも皆さんご存じだろう。今めきめき力をつけ幕内に五人（逆鉾、霧島、陣岳、寺尾、薩洲洋）もの力士を送り出し、我々に一段と相撲を楽しませてくれている。現在井筒部屋には三十七名の弟子がいて、その内⅓が鹿児島県出身者だそうである。相撲部屋が三十いくつかある中で、五人の幕内力士をもつ所は、部屋別では二位である。力士の勝負が土俵なら、親方の勝負は優秀な弟子作りにあるのがこの世界、井筒親方の現役時代は鶴ヶ嶺という名で、関脇として技能派でならし、両差しの名人といわれ、今や弟子作りの名人といわれる。その親方福園先輩を井筒部屋に尋ねてみた。総武線の両国駅から京葉道路を越えて、ものの十分とかからない両国二丁目に部屋があった。玄関を入るとすぐ脇に広々としたけい古場があり、奥の三階建ビルの一室には体力作り用の各種機材を置き、そして弟子達の部屋があるという大きな建物である。尋ねた時は寺尾関と四・五名がけい古中で、あのたくましい肉体と肉体がぶつかり合う時のすざましい音が部屋中に響き、親方の話が聞き取りにくいぐらいであった。

福園昭男氏は、加治木町の出身で旧制加治木中学校（現高校）から予科練へ進み、一年後の終戦で母校へ復学して、昭和二十一年に卒業された。中学時代は相撲にあらず剣道がめっぽう強く、学内で常に一・二位を競う腕前だったとか、また体格も大きい方で全生徒中十番目ぐらいであった。中学を卒業と同時に地元の農業会に、事務員として就職され平凡なサラリーマン生活が始まった。一・二ヶ月務めている内に「コゲンナ　コッジャ　ホケガアガラン」男としてもっと他にやることはないだろうか、という若き情熱にかきたてられている日々の或る晩、ダイヤメをしていた父親に「昭男、薩摩錦が昭男は相撲取りにはナランドカイ、といっているがワイヤイケンカ」といわれた。その時はオイガヨナ、ズブの素人でも　力士になれるものなのだろうかと思ったぐらいであった。薩摩錦は、父親の従兄弟に当る人で、当時井筒部屋にいた関取であった。その薩摩錦関といろいろと話をしている内に「ヨシ　相撲取りになってやろう」と決心し、すぐ勤務先の農業会をやめて、井筒部屋の門をたたかれたのだそうである。昭和二十一年夏のことである。

入門したてはもちろん毎日が雑役ばかり、相撲らしきものをやるようになったのは一年ぐらい後のことで、日がたつにつれて少しづつ、合間を見ては先輩力士に力をつけてもらえるようになった。相撲のけい古が辛いと思ったことは一度もなかったが、メシが腹いっぱい食べられなかったのは実に辛らかった。先輩達がおいしそうに食べるチャンコ鍋を横目に、空腹をかかえ、雑用にけい古にと引き回わされ、外の食堂で食べようにも金はなし、たまに先輩達が食べ残した茶わん一ぱいぐらいのご飯と、そこいらにある残菜を、五升だきの釜にぶちこんで煮込み、同

会費納入にご協力を

会費の納入について　早めに納入していただくよう会員各位のご協力をお願いいたします。

領収済

会員所在の情報を

住所、勤務先、電話等に移動のあった人は、また知り合いでそのような人がおられたら、各期の幹事の方へ情報を提供してくださるようお願いいたします。

僚数人と腹を満たすぐらいが関の山であった。そんな毎日が続いたのには全く閉口した。食糧難の時代とはいえ、相撲取りになればチャンコ鍋が腹いっぱい食べられると思っていただけにガッカリ、まさに挫折の一歩手前であった。なんとなくご飯にありつけ、チャンコ鍋も食べられるようになったのは、入門して二年半目であった。その間は何を食べていたかも記憶にないぐらい、本当に辛い日々であった。いつやめようか、いつ逃げ出そうか、等と何度思ったことか、やめたり転業していった同僚が続出した。プロレスで一時期力道山と一緒の豊登も転業組の一人であった。と親方は苦しかった下積時代の当時を、懐しむように回顧しながら、このような厳しく苦しい時期を乗り越えてこられたのは、加治木中学時代から予科練時代を通して培われた、不屈の斗魂精神が支えになっていたのだと思う、と話された。

早く一人前の力士になりたい一心で猛げい古に励み、その甲斐あって五年目には幕内力士に昇進、以来鶴ヶ嶺関として現役を引退されるまで毎場所、相撲に早さと技があり、いつも上位陣を脅かし、見る人の目を見はらせ楽しませてくれた、あの鶴ヶ嶺関の活躍はまだ我々の記憶に新しい。いま息子である逆鉾関の取り口が、親方の相撲に良く似ているので、秘決でも教えておられるのではと聞くと、とんでもない、相撲は教えても教えられた通りに取れるものではない。日頃のけい古の積み重ねから、自然に自分の身に付けたものでなければ、なかなかそう簡単にいくものではない。すると逆鉾関は、まさに親の血を引くなにものでもないのだろう。長男の福園関は怪我からいま再起に懸命の努力中とか、また弟の寺尾関の運動神経のよさも、これまた血を引いているものであろうし、兄弟三人そろって幕内で土俵を沸かす日のくることを願ってやまない。

自分の子供だからといって、他の弟子達と差別することは決してしない。一様に弟子達みんなに云っていることは、ヤル気があるかどうかだ、ヤル気のないヤツは去るしかない、サッサとやめて行ってくれと、それから素直であれ、指導者の云う事を素直に聞けないようでは進歩しないと、それだけ云って日頃は黙って弟子達のけい古を見ているだけ、幸い素質のある弟子に恵まれ、親方の意をくみ部屋全体がヤル気充分、積極的にみんながけい古しているとおっしゃる。この辺が幕内五人もの関取りを育てあげられた原動力になっているのかもしれない。これから更に、若いモンが何人伸びていってくれるか、親方はそれが楽しみ気な様子であった。

人気が高まれば、当然ファンも集ってくるというもの、ご多分にもれず井筒部屋へのファンも年々増え、後援会を組織し郷里出身者のみならず、全国各地の相撲ファンが名を連らねている。後援会長に二階堂進代議士が就任されており、場所毎の千秋楽には会員が一同に集り、祝賀パーティを開くのが恒例になってきたそうである。写真は五月二十六日の千秋楽に、東京龍門会の前会長の国分氏と現会長の今村氏が祝賀パーティに招待された時のものである。

そろそろオイトマしなければと思っていたら、おいしそうな臭いがただよってきた。奥の炊事場でチャンコ鍋が煮えたってきたのだろう。四十名近い人の夕食を、大きな体の男達が、しかも裸のままで馴れた手つきで仕度中であった。こちらも腹の虫が鳴きだし始めたので、井筒部屋の発展とその弟子達の健斗を祈りながら門を出た。

（編集係）

ミニ通信

○卒業後すでに七十五年、回顧感慨に堪えません。年をとるとますます昔が懐しくなり、皆さんと一緒に思い出の楽しいひとときを過したいのですが、老齢一人は外出がむずかしく失礼します。

（中・明四三卒　前田　稔）

○卒業以来半世紀を十年も過ぎてしまいました。健康で生きがいのある余生を送りたいと念じています。同窓の皆様も達者でお過しください。

（中・大四卒　漆間光治）

○梅干の入ったニギリ飯をぶらさげて毎朝家を素足で飛び出し柁城小学校へ登校した事。また黒川浜は紺青の海で白い砂、ことに磯の岩の下は深い青さで年中魚採りと水泳をやっていたのを思い出しています。打続く台風の洗礼を受けて頑強な海岸堤防となり、明治のころは沖縄、奄美との交易港として繁栄した加治木港も近代的に改築された。大正三年の桜島爆発による堤防欠潰は加治木町の国道近くまで一面海にしたのであったが、新築堤防などで工場地と住宅化された今昔、感慨新たなものがある。

（中・大一四卒　緒方雪男）

○交通事故で通院治療中です。皆様のご健斗を祈ります。

（中・昭二卒　猪目　清）

（勤務先変更）

○河野辰男（中・昭九卒）
日韓文化親善協会へ

○山崎和生（中・昭二二卒）
住海マリンサービス㈱へ

○井上正平（中・昭二二卒）
江戸川区立上一色中学校へ

○古川耕一（高・昭二六卒）
目黒区立第十中学校へ

○宮内　毅（高・昭二七卒）
国税庁へ

○松林宏雪（高・昭二七卒）
岸本産業㈱へ

○新村敏郎（高・昭二七卒）
県立茅ヶ崎北陵高校へ

（住所変更）

○岸野　吉（中・昭四卒）川崎市麻生区百合丘三―九―六

○小川成穂（中・昭十九卒）鹿児島県姶良郡霧島町大字田口霧島山二五八三―二一　霧島ハイツ

○岩城正守（中・昭二十卒）大津市国分一丁目十六―十七

○竜宝高峰（高・昭二五卒）横浜市金沢区六浦町一五三三―八二

○上坂元一人（高・昭二七卒）横浜市緑区青葉台二―三五―八

○浜崎京子（高・昭二八卒）神奈川県大和市福田五丁目二番地八

○東　隼央（高・昭二九卒）川崎市多摩区菅城下五―十三

○安部昌子（高・昭三四卒）船橋市上山町三―五三一―三七

○児島弘武（高・昭三五卒）船橋市大穴南五―三―三三

○姫木昌弘（高・昭三五卒）港区北青山一―二―三　キャタピラ―三菱㈱

○山崎　巌（高・昭三六卒）川崎市多摩区菅仙谷二―二四―三

○塚田有子（高・昭三六卒）葛飾区青戸六―七―二五

○井上　修（高・昭四八卒）名古屋市天白区天白町平針屋下一〇八一―八〇二号

○荒巻信也（中・昭三卒）横浜市緑区すみよし台三二―二一

（訃　報）

○田中彦蔵（中・大三卒）

○木下　弘（中・大十卒）

○加藤実雄（中・大十三卒）

○橋口喜夫（中・大十四卒）

○山路秋馬（中・大十四卒）

○小林新作（中・昭十三卒）

○山口秋男（中・昭十六卒）

○緒方英世（中・昭十八卒）

○原田　中（高・昭二四卒）